

高二デビュー!!

ゆーきち

今日は待ちに待った登校日。そしてクラス発表の日だ。高鳴る鼓動に胸を躍らせながら高校の門をくぐる。大丈夫、今日はきつといい日になる。高一の時はうまくいかなかった学生生活を取り戻してみせる!

クラス発表が張り出された廊下には同じ学年の生徒がわんさかとたむろしていた。まるで小人の国に迷い込んだようだ。やれ誰々と同じクラスだのこれからよろしくだのと、青春のページを更新する様は全てが青々しい。

「俺のクラスは……っと」

自分のクラスを探していると、肩を叩かれた。友人の戌亥だ。陰気っぽく長い髪を垂らした彼だが、行きつけのゲームセンターでは鬼神の如き強さを誇る。

「よっ、もうクラスは見つかったか?」

「ああ、どうやらC組みたいだ。お前は?」

「おっ俺もだよ。早速教室へ行こうぜ」

戌亥に連れられてC組の教室へ向かう。教室に向かっている途中でチャイムが鳴ってしまい、俺たちは急いで教室へ駆け込んだ。

すでに何人かの生徒は着席しており、戌亥も左前方の席についた。俺も自分の席を探さなくては。

学校の机には長方形のネームカードが貼り付けられており、自分の席がわかるようになってる。

しかし、俺の席はなかなか見つからなかった。あいにくと、見知った相手はこの中だと戌亥だけだったので、名前の順から位置を特定するのも難しい。

仕方がないので、机のネームカードを一つずつ見ていくことにした。

名前順的に、このナカムラっていう女子の近くに俺の席もあるはずだ。中村の席を見ていると、痛いくらいの視線が俺を刺していることに気付く。ふと顔を上げると、中村と思しき女子は石の下の虫でも見る顔をしていた。

なんで俺の顔を見てロコツに嫌な顔をする?

確かに、俺はこのナカムラサンのようないわゆる一軍に所属する風貌はしてないかもだけど、そんなツラしなくてもいいだろう。

「あ、仁平くん、だっけ?」

声をかけてきたのは、C組の担任だった。去年までは俺たちの学年に担任は持っていなかった教師だ。小柄で眼鏡をかけた、おとなしそうな女教師。なんとなく担当教科は古典っぽい。

なんでそんな彼女が俺の名前を知っている?

俺たちは初対面のハズ。

「君の教室はここじゃないよ。君はヤンキーが多いE組」
なん……だって。顔がカアッと熱くなるのを感じた。

この人、優しそうな顔で容赦なく刺してくるな。

せつかく失った高校生活の青春を取り戻そうと意気込んできたのに、ヤンキーなんかと同じクラスになったら台無しにされてしまうじゃないか！

ヤンキー。今でこそ廊下をバイクで走ったり窓をバツトで叩き割ったりする風景は過去のイサンとなったが、やはりそういうイデンシは存在するわけで、この高校にも一定数そういうのがいる。

なんで俺がヤンキーの多いE組なんだ？

ヤンキーなんて、他人の迷惑を顧みずに自分の欲求を通そうとするガワだけ成長した赤ん坊みたいなものだろう。そんな集団に俺を投げ込もうってのか。

困惑する俺を見て、成玄は苦笑いを浮かべていた。俺は奥歯を噛み締め、

「ヤンキーが多いって情報はいらなかったつすよ」

と吐き捨て、教室の空気が緩むのを感じながら教室を後にした。

クソ、まさか入る教室を間違えるなんて。俺がC組ってのは見間違いだっただけか？ 間違って他の教室に入ったのも恥ずかしいし、ヤンキーだらけのクラスに入るの

もユウウツだ。

ハア、と息を吐いてE組の扉を開いた。

E組の教室はC組とは似ても似つかない、落ち着きのなさだった。

なぜか全体的にムワツとした嫌な空気が占めていた。全員席についてはいるが、ガヤガヤワチャワチャと何かしらの音が鳴っている。担任の話も聞いているんだか聞いていないんだか。小学生だつてもっと落ち着きがある。

「おう、仁平。お前の席はあそこだ」

俺に気付いた副担任が話中の担任に代わってシンセツに俺の席を教えてくれた。そもそも始業日から担任が二人いる時点でこのクラスのヨウソウがわかるつてもんだ。

担任の教師がどちらも肉体派な男教師。それはヤンキーを抑えるためだろうか。この手のセンコーはヤンキーでも共に汗を流せば分かり合えるだとか、あの子は本当はいい子だとか本気で思ってたから嫌いだ。ウツ病の人にもチュウチョなく「ガンバレ」って言うタイプ。

はつきり言おう。ヤンキーはカスだ。このクラスは腐ったみかんの段ボール箱だ。このヤンキー臭だけで吐き気がしてくる。彼らは平気で他人を踏みにじり、傷つけることができる。そんな奴らと仲良くする教師どもも腐ったみかんに群がるウジムシだ。

席に向かうと、これまた去年まで付き合いのあった浅野と坂口が声をかけてきた。

「なんだ、お前このクラスだったのかよ」

差し出された坂口の左手を俺の右手でパンツと叩く。

「フホインながらな」

この二人ともよくゲームセンターに遊びに行ったものだ。少々太り気味な、ちよいとオタクっぽさのある二人だが、気のいい奴らだ。

彼らと同じクラスとなれたことは不幸中の幸いだろう。

長つたらしい教師の話が終わると、すぐにお祭り騒ぎのバカ騒ぎとなった。腐ったみかんどもが箱の中で暴れ始めた。

奴らがものを投げ合い、絡み合うのを周りはキヒの目で見ている。そのうち、俺の方にも物が飛んできた。

その時、俺はロコツに嫌な顔をしてしまった。これじやあ、ナカムラサンのことを悪く言えないな。

そう思っていた矢先、太い声が降りかかってきた。

「おうコラ、なにガンつけてんだ？ あ？」

ヤバ、嫌な顔してたのがバレた。

思うが早い、ソイツはズンズンと俺の席に寄ってきて、胸ぐらをとつつかんだ。

絡まれる俺を見て、浅野と坂口はよそよそしい態度をとっている。誰だってこんなトラブルには巻き込まれたくないだろう。

お仲間のみかんどもはこちらを見てニヤニヤしている。

気持ちが悪い。弱い者いじめでしか楽しめないくせに。

「や、やめろよ……」

「なんやコラ、文句あるんならハッキリ言えよオラ！」

同時に、ソイツは俺に一発見舞った。脳への衝撃、遅れて口の中に鉄の味が広がる。拳を受けた部分から痛みが口の中を切り裂いていく。

最悪だ。俺の高校生活二年目もうまくいきそうにない。俺は覚悟を決めた。

数瞬の後、件のヤンキーは後方のお仲間の下へ吹っ飛んだ。倒れたヤンキーの顎は砕かれ、下顎に血が滴っている。

ヤンキーはカス。その認識に異論の余地はない。

そして、俺もソツチ側だ。

俺は振り抜いた右手を払いながら、次に備えた。